

最上 裕

夏のきつい日差しは屋外から暗い倉庫に飛び込むと、目が慣れないうちには中の様子がよく見えない。仕事に追われ、午後の時間前に部品さがしに来た佐竹のようやく暗さに慣れた目に、ぼんやりと浮かび上がってきたのは、白い灰皿だった。

昼休みの倉庫には、深い湖底の時間が止まったような静けさが漂い、灰皿の白さは周りの空気にしみ出すような柔らかなさであった。灰皿がのった机の上は、きれいに片づけられていた。

日頃、騒がしくおしゃべりをしているパートのおばさん達も今日はなぜか静かだ。年配の男達も腕組をしておし黙っている。佐竹は、やっとその灰皿が置かれている机が、山さんのだということに気づいた。

佐竹もその場の雰囲気にあわせるように小声でパートのおばさんに尋ねた。

「どうしたんですか、山さん」

その小太りのおばさんは、自分はこの雰囲気をごわす気はないんだけど、尋ねられたらしかたないという表情を見せながら、一方でさつきからうずうずして待っていた様子で、勢い込んでしゃべりだした。

「山さんがね、なくなっただよ。課長がさつき来て言っただけで、昨夜の事だ。あんなに元気だったのにね。一か月前までいっしょに仕事していたのにね。やっぱりガンだったそうだよ。かわいそうにね。こんなことなら一度見舞いに行っとくんだった。だって、休む前も元気で何も言っていなかったもの」

「ちょっとヤボ用に行ってるって、あの世に用たしに行っちゃあな」

タバコをくゆらせていた徳さんが、口をはさんだ。

「それにしても花ぐらい飾ってあげたいんだけどないから、山さんが好きだった灰皿を洗って置いてあるのよ。課長も気をきかせて花ぐらい用意すればいいのに」

おばさんが口をとがらせて言った。

「あの灰皿で、喫煙所に行かないで、かくれて山さんとタバコすったもんだ。はかねえもんだ。人間ってえのは」

徳さんの二言が、みんなを深い沈黙に押し戻した。

佐竹は、山さんと特別親しかった訳ではなかったが、この会社の中では親近感を感じていた人のひとりだった。

佐竹達は、労働組合の民主的強化を訴えて門前でピラまきをしたり、カンパの訴えをしているが、二年前の一時金カンパの時のことだった。

その日はあいにくの雨で、佐竹はがっかりした。雨の日は、みんな手がふさがっているし、傘にかくれて佐竹達を避けていくからだ。

佐竹は雨に打たれながら、目の前を通り過ぎる傘の流れに向かって大声で呼びかけていた。その時、黒い傘のひとつがつかいと流れからはずれ、佐竹の方にやってきた。そして、傘の下から伸びた手が、募金箱に千円札をいれた。

「ありがとうございます」

頭を下げる佐竹に、傘の主は顔を見せないまま

「がんばんなよ」

と一言いって、傘の流れに戻っていった。髪から垂れたしずくをぬぐって、佐竹が顔をあげた時には、前の人足元だけを見つめて歩く長い行列が続いているだけだった。

佐竹は、その行列に何度も頭を下げながら、その傘の主に思いをめぐらせていた。どこかで聞いた事のある声だった。

佐竹の仕事は、大型計算機の客先別オーダーの工程トレースで、現場の日程遅れをおおったり、足りない部品をかき集めてきたりすることだ。最近持たされるオーダーの本数も増え、目のまわる忙しさだったので、傘の主のこともしばらく忘れていた。

ある日、佐竹は欠品の補充の為、倉庫で部品をさがしていた。その時、不意に後ろから声をかけられた。

「竹さん、あのオーダーの部品揃ったよ」

その声が、佐竹の頭の中を駆けめぐった。あの声だ。

佐竹が振り返ると、そこには柔和な笑いを浮かべた白髪の山さんが立っていた。

「山さんかあ。……ポータスの時はどうも」

そう言っ、佐竹が頭を下げると、山さんは一瞬ぎくつとしたが、再び笑いを浮かべ

「なーに、はした金だよ。どうせ、お馬ですってしまっ金さ」

と言っ、そそくさと他に行ってしまった。会社の中で疎外されている佐竹にとって、山さんのカンパや一言は暗闇の中の一条の明かりだった。佐竹は、一か月ほど迷った挙げ句、ある日の夕方、周りに人がいないのを見はからって、赤旗新聞の購読を山さんに頼んだ。しかし、山さんは別人のような固い表情で視線をそらし、冷たい調子で言った。

「だめだ。確かにあんたらはいいこと言っているよ。でも、力はねえ。会社は強えからな。俺も、お情けでここに置いてもらっているようなもんだし、ここを追い出されるど行く所がねえ」

何度も経験していることだが、佐竹は期待していた分足元をすくわれるような思いで、胸にこたえた。

がんばってほしい。でも、カンパ以上の協力はできない。山さん達の立場のあやうさを思えば当然のことなのだ。山さんが悪いのではない。それは佐竹にもわかってきた。わかってきたが、心がめいって。それ以降、佐竹は、なんとなく山さんと話すのをためらっていた。

今年になって、佐竹は街で山さんを見かけた。佐竹は、

買い物の帰りで、駅に入ろうとしていた。競馬場からあふれた同じ様な風体の男達の中に山さんはいた。手に競馬新聞を丸めて持ち、隣の男と笑っていた。

駅前で、消費税反対の署名をしていた。山さんは自分から署名し、いっしょにいた男にも薦めていた。男は、いやがっていたが、最後にはしぶしぶ書いていた。

佐竹は、山さんに声をかけようと思ったが、やめて電車にのった。それでも今度、山さんにあつたら、いろいろ話ができそうな気がしていた。

佐竹は、もっと時間をかけて山さんの歩んできた人生について話しを聞きたかった。当然、その時間はあると思っていた。しかし、時間は突然断ち切られてしまったのだ。

佐竹は唇をかんで、灰皿に頭をさげた。倉庫の壁には、窓がない。弱い蛍光灯が、唯一の光である。その薄暗い光の下で、灰皿は穏やかな白さであった。